

老耄ろうもうの愚痴

高知県 東山 林

、 出生から入隊前後のこと

大正六年七月十六日、高知県長岡郡大津村甲一七八番地（現在高知市大津甲一七八）で、（父英雄二十二歳、母こまお十八歳）貧農の家の長男として呱呱の声を上げたと言かされております。

昭和六年三月、大津村立尋常高等小学校を卒業してからは、母親代わりとなって弟妹の面倒を見ながら家計の手助けをしなければなりませんでした。と申しますのは、曾祖母七十二歳、祖父六十歳、叔母三十五歳、妹八歳が次々に死亡し、さらに母が三十八歳で病臥し、四十歳で死亡したからであります。

当時「赤貧洗うが如し」という諺は、まさに我が家のためにつくられたものではあるまいかと何回も思ったことがあります。

昭和十二年八月、徴集検査で甲種合格となり、翌十三年一月十日、香川県善通寺市の山砲兵第一連隊へ昭和十二年徴兵現役兵として入隊しました。当時は戦局が支那事変の延長線上にあり、軍務は非常に厳しく、私的制裁などは常時行われていましたが、上級幹部の人たちは、これを見ても見ぬふりをしていたところがあつたように思われました。

昭和十三年十月、部隊（第一師団全部隊）が渡満し、山砲兵第一連隊は、南滿の海域、東北滿の東安、密山、虎林と所を変えて駐屯警備に当たり、昭和十四年六月、ノモンハン事変に参加、昭和十六年の関特演（関東軍特殊演習）が過ぎ、虎林駐屯部隊は南方戦線への出撃基地という感じの時期もあり、戦局は必ずしも我に有利に展開しているとは思われぬ情報も入手していました。

昭和十九年ごろから、部隊は本土防衛の目的で転進計画を持ち、ソ満国境防衛のため在満各地で新設部隊が編成されましたが、私は昭和二十年三月三十一日付で、牡丹江で編成された独立混成第七九旅団砲兵隊

に転属を命ぜられ、第一中隊付として赴任いたしました。（裏話として……当時、私はB A 一 第二大隊本部書記として人事面を担当していましたから、新設部隊に転出させる兵は、四つの条件のうちその一つを持つ者とする、という内示があり、身上調書により該当者を拾い上げて、その名簿を提出したことを思い出しています。

なお、B A 一 は昭和二十年四月に、四国を中心とした西日本に分散して帰国し、本土防衛の任についていたことをつけ加えておきます）

二、ソ連侵攻直前のこと

独立混成第七九旅団砲兵隊を編成してから、その主力は各地で陣地構築を行いながら南下し、昭和二十年五月から六月にかけて部隊が石頭に駐屯していた時期に、在満の徴集兵や朝鮮人兵が入隊し、私はその兵たちの教育の任に当たりましたが、繰り上げ徴集で年齢が十八歳の者もありましたし、また、召集で妻子のある四十歳の人もおりました。また、朝鮮人兵は非常に有能な兵が多くいたことを思い出しています。

“教育”などと言えば偉そうに思われがちですが、何のことはありません。毎日、幹部候補生の有資格者も含めて一緒にタコツボを掘り、戦車地雷を一人一個ずつ持たせ、そのタコツボに身を隠して待機し、敵戦車目がけて体当たりを敢行するという戦術ですから、推して知るべきものでありましょう。裏を返せば、戦況はそれだけ追い詰められていたということではないでしょう。

部隊の名称は砲兵隊ですが、砲は青天白日旗の刻印のある迫撃砲で、おそらく支那事変のときの戦利品であろうと想像しましたが、この砲が一中隊に四門しかなく、しかも使用する実弾は見たこともなく、木製の模擬弾で訓練したのですから、これが精強を誇った関東軍の哀れな末路をたどる実態であったと申し上げたいのです。

三、ソ連侵攻と終戦

昭和二十年八月上旬、戦局は刻々我が軍に悪化の一途をたどり、部隊はアメリカ軍の上陸を想定して、鮮満国境要衝の地、鴨緑江河口の町、安東まで南下して

布陣しましたが、石頭に残した妻帯者の家族を迎えるため下士官を長とする数名を派遣し、家族と共に帰隊した者の報告により、東北満方面ではソ連軍が既に侵攻し、国境付近に駐屯している部隊は交戦中、開拓団員や一般邦人は戦火を逃れて南下中であることを知りました。それが八月十日ごろであったと思います。

安東ではアメリカ軍の上陸もなく、ソ連軍の南侵攻も九月上旬になりましたから、我々の部隊は直接戦火を交えることもなく済みました。終戦の前日、「明八月十五日に天皇陛下の重大な放送があるので全員拝聴するように」との下達があり、一同かたずをのみラジオの前で緊張して聞きましたが、ラジオはただガーガーと鳴る雑音ばかりで、内容を正確に聞き取ることができませんでした。

終わって後から司令部よりの通達で、終戦宣言であったことを知った次第であります。そして、松尾大隊長から、無念、残念の思いでまことに忍びがたいが、我が部隊は別命があるまで行動を一つにしてほしいとの訓話（要請）があり、私も部隊と行動を共にしたの

であります。

この時点を境に、満州国内では八路軍と蒋介石軍との内戦の混乱に加えて治安状態が急速に悪化し、官舎や日本人宿舎ではたびたび満人の略奪が行われ、特に軍人の家族は戦々恐々の毎日が続きました。皆さんの多くが後難を恐れて、軍隊に関係した書類や手紙、写真などはすべて焼却処理したのです。私の場合も同じようにして、妻と離別するとき、白布に包んだ「短刀」を渡し、「万一はずかしめを受けるようなことがあれば、これで処置せよ」と言って別れたのです。（鬼の目にも涙が……）

ソ連軍が安東まで侵攻してから武器は学校の校庭に集めて山積みにし、ソ連軍に引き渡しましたが、宝の持ち腐れといえますか、その中にはまだ一度も使ったことのない、グリスの付いた包装紙で包んである無線通信機や電話器等の通信機材もありましたし、拳銃や九九式単小銃や帯剣はもちろんのこと、手旗からラッパに至るまでありまして、全くの丸腰となったのです。ただし、将校の軍刀だけは帯刀を許されていましたか

ら、ちよつと違和感が生まれました。

四、シベリア抑留への旅

終戦と同時に離隊、逃亡する者が続出しましたので、生きた兵器と言われて約千頭近くいた軍馬の管理も満足に行うことが困難になっていました。ソ連軍の命令で、少なくなった隊員が馬群を連れて、安東から北西へ約三百キロメートルにある古都奉天まで、ソ連側の「ダモイ東京」という言葉を信じての行軍です。丸腰になってからの行軍ですから、規律などあったものではなく、道中十日余りの間の難行は実に情けなかつたのです。一人が二頭も三頭も連れてるので、気のきいた者は満人と食物と馬の交換をして、身動きを軽くしていました。また、野営中行方不明になった者も馬もありました。

行方不明になった者の一人、A二等兵のことをよく思い出します。営口の会社からの応召兵で三十四歳でした。生まれて初めて馬に近づく応召兵も多く、三カ月間、馬の世話で苦勞したあげくの終戦ですから、現地に妻子を残している彼を責めることはできません。

それは行軍半ばのこと。鳳凰城あたりで野営をした夜のこと、既に九月に入っている満州の夜は深い秋を思わせます。疲れた兵たちのイビキと地虫の鳴き声、馬繋場から風に乗って流れてくる馬糞の匂い……馬は徴発の運命であろうが、我々は一体どうなるのだろう、人事面を担当していた立場から私は思い悩みました。夜中の三時ごろから雨が降り出したのです。兵も馬もご難なのが野営のつらさです。天幕の中で濡れまいと脚をかがめて体を丸くしているうち、ウトウトと眠ってしまいました。騒がしさに目覚めたらもう夜明けが間近です。報告によれば、他の中隊で駄馬が数頭放馬したらしく、責任を恐れた兵が二名逃亡したということです。

「チュルマ!!チュルマ!!(監獄行きだ)」とソ連将校が中隊長に当たり散らしています。任官早々の若い少尉はただ狼狽するのみです。現場を見ると馬索も乱れ、馬糞は臭く散乱し、前肢で土を掻く馬、飼糧桶をひっくり返す馬、タテガミを振り立てて天に嘶く馬などなど、不馴れた兵は手をこまぬき、班長は声高に叫ぶ騒

然たるありさま、私は顔見知りのX軍曹に整理順序を示した後、この騒ぎにまぎれてA二等兵が脱走したことを知りました。安全逃避行を祈るのみ……。

九月下旬、奉天（北陵大学校舎）収容所に到着。それからの仕事はすべて馬の検査、健康馬だけを貨車積みしてソ連へ送り出すのが日課で、この作業に約一カ月半を費やしました。

私の愛馬だった「杉代（スギシロ）」（馬籍は北海道産、サラ雑、六歳、昭和十五年徴発、特徴は黒鹿毛・小星、左前半白右後一白、左腰左旋毛、基高百六十センチメートル、馬体重三百二十キロ、損徴は両背鞍傷痕異毛各一、腹帯痕異毛右という立派な馬でしたが、蹴癖、咬癖、熊動逃亡癖と三拍子揃っていましたから、私以外の者ではとうてい扱いが困難でしたけれども、私の言うことには不思議過ぎるほど従順でした）¹¹も送り出さねばなりません。その日、五年間行動を共にした数々の思い出を噛みしめながら、タテガミを切つて形見とし、好物であった高粱を飯盒で煮て与え、別れを惜しんだことでした。……なんぞ知らん、「杉

代」と同じソ連への旅立ちになろうとは。

北稜収容所に入ったとき、既に幾組かの部隊が編成されて入ソしたとの話は耳にしましたが、ソ連軍の監視下であったとはいえ、我々はまだ軍隊としての形が整っていましたから、毎日、朝礼、点呼も行なわれ、比較的整然とした行動をしていました。

この収容所には我々のほかにも、北満から南下してきたという難民も大ぜいいて、婦人はことごとく髪を切り、戦闘帽に軍服着用というかつこうをしていましたが、これは、ソ連兵の目をごまかす方法としてとられた措置であると聞かされ、終戦を知らずに戦った東北満の部隊や、その付近の義勇軍、開拓団員、その他一般邦人の苦難のほどを想像して語り合いました。毎日、マンドリン（自動小銃）を持ったソ連兵に追いつかれ、飲まず食わずの日が多かったため、体力は急速に衰え、乳飲み子を抱えた母親の姿は「みじめ」と言うよりほか表現のしようもありません。

我々がこの収容所に入ってから数週間後には、校庭に土饅頭と墓標が林立しました。これはすべて難民と

その乳飲み子たちのものでした。ある日のこと、夕暮れ時、墓標のそばでうずくまっている人を見かけましたが、どうも様子が変だと思つて近づいてみますと、その婦人は既に冷たくなつており、戦友と一緒に墓標のそばに穴を掘り、そのまま土を覆つて両手を合わせ冥福を祈りましたが、どこのだれだか全く知る術もなく、後ろ髪を引かれる思いがいたしました。このような状態は日常茶飯事となつていましたので、人が倒れているのを見ても、手をかして始末する者も少なく、「自分が生きる」ことで、ほかに何も考える余裕など持ち合わせがないように感じました。

部隊内でも、いずれ我々もソ連領内に連行されるであらう、そして、生命の保証など夢のまた夢だという気持ちが強くなり、中には「このままでは内地へ帰ることができないと思うから逃がしてくれ」と申し出る者もありましたが、しかし私は「中隊の最高責任者ではなく、また部隊によつては既に解散したところもあると聞くから、今、あなたの意志を差しとめる権利もないので、その申し出は私の知らないことにしておき

ます」ということで目を閉じ、こうした形で部隊を離れていった人々は、主として二十年五月から六月にかけて「石頭」で入隊した在満徴集者が多かつたように記憶しております。

十一月中旬となり、寒さも一段と厳しさが加わり始めたころ、予測していたとおり、我々が入ソすることになりましたが、今度は部隊固有の人員が足りなくなつています。

だれの命令でどこから来たのか私は全く知りませんでしたが、風呂敷包み一つ持った人々が大ぜい校庭に並び、指揮官とおぼしき将校が指図し、この何名は何中隊へ、次の列何名は何中隊へ、といった具合に人員を配分し、部隊固有の人員に充足し、そのままの編成で有蓋車を二段に急造した貨車に詰め込まれ、外から施錠し、一両ごとに自動小銃を持ったソ連兵の監視付きで入ソしました（後で知つたのですが、充足要員は関東軍司令部の高級将校の命令で、奉天付近に在住していた一般邦人や開拓団員たちでありました）。

また、入ソのため編成された部隊の名称は第五勞

勦大隊と称し、大隊長は独混七九旅砲の松尾少佐で、本部四十名、第一中隊長中川中尉で二百四十名、第二中隊長藤堂中尉で二百四十名、第三中隊長矢野中尉で二百四十名、第四中隊長勝又中尉で二百四十名、合計一千名となる部隊ですが、内容は独混七九旅砲を主力とし、独歩の一部、入院下番者、一般邦人から成る混成部隊で、同時に編成された第五九労働大隊と称する五百名から成る部隊と同じ列車で入ソしたのであります。

このときの前後の記憶として、次のようなことが強く印象に残っております。

携行糧秣とソ連兵の数量確認のこと

糧秣は、我々が入ソ後必要な量として陸軍給与令による三カ月分を貨車に積み込みました。一人が一個ずつ担いで貨車内へ縦六列横五列に並べ、その上に六段積み重ねますと、数量は(六×五)×六＝百八十個と暗算でも計算されますが、数量の確認に立ち会っていたソ連兵は、百八十二個だ、お前たちは数量をごまかしていると言つて承知しません。どう説明しても頑と

して承知しません。これには恐れ入つて再度積み替えて百八十個に間違いのないことを示しましたが、全くあいた口がふさがらず、うんざりしました。

中隊長が逃亡したこと

千五百名とその隊員に要する三カ月分の糧秣と消耗品を積んだ列車は、前述したように五目しし詰め状態で、昼は一日じゅう駅の引込線で停車し、夜だけノンストップで突つ走る。そして十数日間を要し、奉天へハルビンへチチハルへ満州里を経て入ソ、シベリア鉄道沿線上の小落、ハラグンという一寒村に着きましたが、その途中、四平の駅に停車中、中隊長が我々隊員を貨車に残したまま単独逃亡をしたのであります。

私はこれを察知してすぐ大隊長に事情を報告しましたら、大隊長からは、今、口外することは相ならぬとの命を受けましたので、中隊員には公表しませんでしたけれども、二、三日すると、どうも様子がおかしい、変だぞということ、やむなく本当のことを知らせましたところ、蜂の巣を突つたような状態となり、隊員の気持ちを静め、中隊を掌握して統一行動をするの

に大変苦労しました。

満州里で隊員が射殺されたこと

満州国内最後の駅、満州里で停車した際、遠くまで雪明かりの見通しができる約三十メートル前方に動く人を見たその瞬間、ダダダダ！とけたたましい自動小銃の音と同時に、黒い影は真っ白い雪の上に倒れました。一瞬、静まり返りましたが、「もしや」と思い、中隊員の乗っている車両を回り人員点呼をしましたところ、果たせるかな、我が中隊第四分隊の所属で、奉天出発のとき、北陵収容所で配属された人であることが判明しました。すぐ大隊長に報告し指示を求めましたが、明確な答えが得られません。致し方なく、単独で監視のソ連兵と交渉し、遺品の一つでも取っておこうと考えて、言葉が通じませんから手まね足まねで説明し交渉しましたが、結局どうすることもできず、そのままにして出発しました。せめて住所氏名だけでもわかればと考えて、後でいろいろ調べましたが、このだれだか知ることもできず、今もって残念、悔やまれてなりません。

貨車内で大小便の始末に困ったこと

私は停車中、隊員の掌握や大隊本部との連絡のため車外に出ることを許されておりましたから、用便も適当に車外で済ませましたけれども、他の隊員は外に出ることができず、車内で大小便の始末もしなければなりませんでしたから、十数日間に及ぶ車両内の生活状態がおよそどのようなありさまであったかについては、読む人の想像にお任せすることにして、この状態のことを今さらここで事細かく語りたくありません。しかし、ただ一言、これは普通人間のやるようなことではなかった、ということだけ申し上げておきます。

五、抑留地の生活

ハラグンは、チタからシベリア鉄道に沿って西へ約二百五十キロメートルのところにある一寒村であります。現在日本で販売されているどの地図でも見つけることはできません。十一月下旬であったか、駅舎もない引込線に停車し、全員貨車から飛び降り、暗くなりかけてはいたが、見通しはかなり遠くまで確かめられます。「ブイストラ！ブイストラ！」とソ連兵の肩

にかけた自動小銃でこづかれながら、膝まで没する雪の草原を歩くこと約一時間余り。欲張って持てるだけ多量の荷物を背負ったので汗でびっしり、凍傷になるのではあるまいかと心配したが、どうにか寒さをはね返して立ったままの野宿です。横になって眠ることもできず、四、五人が体を寄せ合って寒さに耐えねばなりません。周囲が次第に明るさを増してきたころ、再び出発。三、四時間雪原を歩いて、やっとたどり着いたところが、これから我々が住む収容所。その場所というのが、高さ四メートル以上もある松の丸太を打ち込み、鉄条網（有刺鉄線）で二重張りに補強され、四隅には六、七メートルの高い監視塔が建ち、面積は縦二百メートル、横三百メートルはあると思われる広さの囲いの中へ投げ込まれた形、住む建物など何一つない雪野原です。後で知りましたが、この柵はルーマニアの捕虜がつくったものとわかりました。

さて、ここでこれから、どのような仕事をさせられるのか全く知る術ありませんでしたが、まず住む（寝る）ところをつくらねばなりません。このままの

状態で夜を越すようでは凍死を覚悟せねばなりません。各分隊ごとに持ってきた円匙（えんぴ）（小型シャベル）で雪を除き、草を刈り、凍りついた土を少し掘って雑木（主として白樺や松）を切り集めて半地下式のカマボコ型の屋根をつくり、小枝や雑草、携帯天幕で覆い、その上に雪を叩きつけてかためた穴蔵をつくって、その中で寝起きしながら、翌二十一年五月までノルマを課せられた、なれない伐採という重労働を強要されたのであります。

暖をとるのはすべて枯木。外は白樺の木の皮、関東軍の兵隊が百年かかっても切り尽くせないという大原始林であったと言われますから、採暖のための原料集めには余りの労は要しませんでしたけれども、穴蔵の中での採光は、穴蔵の通風を遮断した形の造りでしたから、朝になると皆さん、だれだかわからないように煤で顔は真っ黒、結膜炎で泣きつ面の人ばかり。おまけに劣悪な給与、敗戦虜囚という汚名を着せられた精神的打撃は、我々の体力を急速にむしばみ続けたのであります。加えて、零下三〇度を超す酷暑の毎日、そ

うした環境にあつてノルマとマンドリンに追い立てられる伐採作業、さらに我々を苦しめたシラミと南京虫の大部に総攻撃を受けつつ、アメーバー赤痢の発生が栄養失調の要諦となつて現れ、私の所属していた第一中隊だけでも三十八人に上る犠牲者を見るに至つたのであります。返す返すもまことに残念でなりません。そして、この六カ月間、衣服は着たままで、一度も洗濯したり消毒したりして着替えたこともありませんし、また、入浴したこともありませんでした。

当時の食事の状態は、主食の黒パンが桃印マッチ小箱程度の大きさのものが一個に、スープは飯盒のふたに一ぱいで、これだけの量が一食分でした。パンを配分するときは、耳は堅くて重く、中の方はやわらかくて軽いので、天秤をつくり、水平になるように隊員総監視の中で行われました。また、スープは底に大豆や高粱の粒が沈んでいるから、一度金網を使って別の容器へ移し、金網の上に乗っているものを二個、三個と数えながら、平等に分配した後、汁を分けました。将校、下士官、兵を問わず、人間の持つ動物的本性をむ

き出しにしたのはこのときで、その人の価値を知ることができました。

くたくたになつて伐採作業から穴蔵へ帰り、前述の夕食をしながら故郷の食い物の話をしていた隣の戦友が何も言わなくなつたので、「オイ！どうした？」と肘で軽く突いたら、ゴロンと倒れて死んでいったことや、「今生の思い出に腹いっぱい食わせてほしい」と申し出た兵に、私は自分のものと比較的元気な同僚の分を集めて与えたら「うまい、うまい」と言つて食べたのはよかつたが、翌朝、彼は冷たくなつていたこと。全員が赤痢にかかり、一晚に二十回も三十回も便所（自分たちでつくつた野雪隠）へ行くので、穴蔵まで帰り着くいとまもなく、毛布に身を包み零下三〇度を超す寒気にさらされながら、便所のそばの雪の上でうずくまっていた姿が浮かんできます。私も数え切れないほど便所へ行きながら、立場上、隊員のめんどろを見なければならなかつたことなどなど、地獄を見たことがありますから確たることは言えませんが、もしこの世に地獄があるとすれば、このときの状態を指してい

るのではあるまいか、と今つくづく思い出しています。

それにもう一つ、頭にこびりついて離れないのが、遺体の処理をしたときのこと。

初めのうちは、枯れ木を集めて基盤目に一メートル五十センチくらいの高さに積み重ね、全裸にした遺体をその上に置き、さらにその上に小枝を置いて下から火をつけ荼毘に付していましたが、三月に入り、「遺体を焼くことは相ならぬ」とソ連側の命令があり、凍土はどうしても満足に掘ることができず、雪を覆って葬ったのはよいが、次の日にその場所へ行ってみると、一面に荒らされていて、遺体は跡形もなくなっていたこともありました。これは餓狼の群のしわざであることを知り、茫然、暗涙にむせんのです。

こうして犠牲となった方々の遺体を処理してきた私は、どうしても、ご遺族の方々には実情をお伝えする責任があるように思い、知る限りの記録を極秘に持ち帰り、関係者に対し「資料」として提供したり、また、政府の行う諸調査等にも協力しておりますが、ごく最近、ソ連側から日本政府を通して発表された死亡者名

簿（三万八千六百四十七人）の中には、我々が収容されていた地名、ハラグンという名の収容所も、第五労働大隊（五二〇収容所）の名前も、三十八人の死亡者の名前も見つけることのできないのが残念で、寂しい気がいたします。

ここで、今まで私の知らなかった（部分的には承知していたこともあります）事柄について、証言してください。この一部を発表しておきたいと思います。

〔A〕矢部政史様（独混七九旅砲付軍医）

東京都練馬区石神井町四の十の十四

（前文略）私の記憶にては、五五労働大隊千名中、死亡者は六十七名にて、全部死亡時確認いたしております。再編後の移動前に、屋内二階でソ連兵の誤射にて頭部貫通銃創にて一名死亡は入っております。奉天（ハラグン）間の移動中の死亡も入っております。再編後には、死亡者には立ち会っておりません。五五大隊ハラグン入所時の軍医は青木中尉で、間もなく隣接部隊へ転出後死亡。昭和二十一年、吉田、安武、両

軍医来隊。再編後、他部隊へ転属。三軍医の在隊中も私が死亡を確認しております。五五大隊中、衛生部員は数十名おりましたが、医務室勤務は下士官以下八名であつたと思います。私と隣（毛布で囲つた）の部屋の谷衛生軍曹とが医務室にて宿泊、他の大隊本部、三カ中隊付の衛生兵七名は通勤しており、いつも四、五十名の入室患者がおりました。不幸にも谷軍曹は発疹チフスに感染し死亡しました。ご冥福をお祈りいたします。谷軍曹の所属は大隊本部ではなかつたかと存じます。名前、住所等はわかりません。私以外の衛生部員は全部病気で交代いたしました。ご送付の名簿中、金縄熊七氏の住所で福島県三渚郡……とありますが、三渚郡は実在しません。甚だ簡単でご期待に添えず残念ですが、ご返事申し上げます。

呉々も御身御大切に、目的に向かって邁進して下さい。

十一月十二日

敬具

〔B〕矢野豊数様（独混七九旅砲第三中隊長）

高松市成相町一の六六の八九

拝復、お返事が遅れ申しわけありません。

当時のことについて三中隊の知人に問い合わせますが、まだ返事がありませんのでお許し下さい。もう五十年も昔のことですから、記憶も定かでないのですが、以下覚えていたことを記載します。

①入ソ直前奉天で編成された我々の労働大隊は第一中隊、第四中隊各二百四十名、大隊本部四十名、計一千名

②満州里で列車乗り換え中逃亡した者を含めて、輸送中の逃亡者約二十名

③ハラゲンでの死亡者数は中隊により大差あり。最多は第四中隊（勝又隊）で約百名、最少は第三中隊の五、六名。小生の記憶では、作業中の事故三名位、これは他隊より多かったようだが、栄養失調の死亡者は二、三名のうち二名については、帰国後留守宅に参上しました。

④三中隊の死亡者が少なかったのは、北陸地方の出身現役兵が多く精強であつたこと、ノルマにかかわら

ず食糧を平等に分配したことなどが要因だったと考え
ています。

⑤ ハラゲンで本部にいた上月少尉は十年以上も前に
死亡しました。一度、山形県の彼の家を訪ねたことが
ありました。

⑥ 四中隊にて三浦少尉という民間人（満州警察官）
がいて、大川郡出身だったが、ハラゲンで別れたきり
だったので消息がわからなかったから留守宅を訪問し
たが、昭和四十四、五年ごろまで帰らなかった。

照会した手紙の返事が来て、もし他のことがわかれ
ばまたお知らせします。

急に寒くなりました。ご自愛下さい。

十一月二十一日

矢野 豊数

〔C〕 廣瀬建市様（第五九労働大隊付軍医）

神奈川県川崎市多摩区布田四の一

前文（略） 私が北陵に収容されたのは八月二十日前
後だったと思います。（中間略）昭和二十年十月頃、
私は労働大隊要員として原隊と別れ、労働五五大隊（労

働第五九大隊だったかもしれません）と共に行動した
のです。

この時の編成は、私どもは（東山様方も）千五百名
として、軍医は五百名につき一名ということで三名が
付きました。（中間略）約二週間の貨車輸送の後、ハ
ラゲンに下車しました。

この千五百名の大隊のうち、到着の夜、千名は私達
五百名よりずっと奥の方に行き、本部もここに置かれ、
私達五百名は手前で野宿、毛布でそれぞれ囲い、たき
火をして過ごし、翌朝煙で目を真っ赤にして、ルーマ
ニアの捕虜が出た直後、私達が小屋に入りました。私
達が下車した場所に重い荷物（行李等）を残して不寝
番数人をつけておきましたので、取りに行きましたと
ころ、行李等はすべて開けられ、中の物が引つ張り出
され、目ぼしい物は持ち去られていました。不寝番に
よると、私達が昨夜去った後、ソ連兵が来てこのよう
に開けて目ぼしい物を持ち去ったとのこと、果然とし
ました。

そして、やがて口惜しくなりました。不寝番もど

することもできなかったとのことでした。

私達の五百名は陸軍病院、野戦病院の兵が多く、それに「満飛」の航空隊の方々が大半を占めていたように思います。大隊長は荒井少佐でした。(後五百名組大隊長は勝俣大尉でした。)(中間略)

十二月中旬頃から俄かに給与が悪くなり、例のとおり重湯だけとなり、びっくりして隊長とソ連側に交渉しましたが、ソ連側は「お前達が食糧を持って来なかったからだ」の一点張りで、ノレンに腕押しの状態で、てんで話になりません。私どもは入ソ時、陸軍給与令による食糧及び消耗品等三カ月分を積んで来たのでしたが……翌年、私が大隊本部(千名の方)に行く機会がありました。糧秣倉庫は千名組の方にありましたので、そこから五百名の方にトラックで運搬していましたが、帰りにそのトラックに便乗したところ、途中まで来たところ急に停車し、付近から来て待つていた部落民に、かなりの量の糧秣をトラックからほうり投げておるのを見届けました。口惜しくて仕方がありませんでした。そして、二十一年一月半ばかり栄養失

調者が続出するようになり、死者が出始めて、私もほどこす術ありませんでした。私自身も一月末に高熱を出し、身動きできなくなりましたが、幸いにもソ連ドクターの下給品の少量のビスケットの差し入れがあったから、今まで食欲皆無だったのが、これをきっかけに急に食欲が始め一命を取りとめました。(中略)

五百名中約百名余り(昭和二十一年一月、五月まで)死亡しました。今思い出しても涙が出そうです。この人達は、小屋の裏の小山に埋葬されました。

(中略)

また、千名組の方に私が連絡に行った時、丁度衛生軍曹が発疹チフスで脳症を起こし死亡しました。五百名組の方で私どもの野戦病院配属の輜重兵、上等兵赤坂氏が栄養失調で死亡し、私の呼び声にかすかに目をあげ、僅かに微笑の表情をして私を見たと思ったら、そのまま息を引き取りました。いまだに彼の顔が目映ります。

青木軍医中尉、赤坂上等兵の故郷、住所等はわからず、当時の人事係も内地で病死しておられ、確かめよ

うがありません。(中略、後略)

平成五年十二月八日

敬具

〔D〕岡本喜一様(独混七九旅砲第一中隊員)

高知県香美郡土佐山田町新改

私の職業は農業であります。入隊前、農閑期には炭焼きや材木の切り出しなどをしていましたので、肉体労働には十分自信を持っていました。シベリアでの伐採作業は余りきついとは思わなかったのですが、給与が悪く量が少ないのは弱りました。

今でも一番印象に残っている事を記したいと思います。

その日もいつものように伐採のノルマを終えて一人ラーゲルに戻ったら、東山さん(当時隊長)が、「今から亡くなった戦友を焼きに行くので、岡本、手伝ってくれ」と言われた。支度を解かぬまますぐ行って行った。林の中で木を切り倒し、適当の長さ(約二メートルくらい)に玉切り、碁盤のように槽に一メートルくらい積み上げ、その上に戦友を全裸にしたまま寝か

して、またその上に材木を積み、枝をかぶせて下から火をつけて焼くのであった。そこで、木の又を切って火がよく回るように繰り返し行うのだが、その都度ジュージューと音がする。炎の中から「もの言わぬ戦友」が何かつぶやいているように聞こえるのである。また、その異臭が何とも言えない。ウルメを焼く匂いみたい。その間約二時間余り、炎の順調なことを見届けて、東山さんに従ってラーゲルに帰ってきた。夕食が待っていた。ところが、どうしても食事がのどを通らない。翌朝もとうとう食えずに山の作業に行ったことを思い出す。敗戦の惨めさを深く噛みしめたことであつた。そして、その日もノルマを何とか終えて戻ると、また東山さんが、前日同様「新たな犠牲者を焼きに行くのだ」と言われる。前日のさまが頭にこびりついているので、嫌だと思つたが、誰かが行かねばならない……。しかし、こんな惨めな茶毘は余りにも亡き戦友が哀れで、見るに忍びない……。二度としたくない。やはり断ろう……。しかし、次のことを考えておかねばならない。次のことは、次は俺が焼いてもらう番だと思ひ、

気を取り直して「嫌」とは言わなかったことを「幸いだった」とさえ思った。そして、前日同様東山さんについて行き、同じ要領で焼いたのである。こんなことが何日続いたであろう？

ある時、いつものように十分炎焼していることを確認してラーゲルに戻り、そして翌朝行ってみたら、少し焼け残りがあつただろうか、いつもと違って骨も燃え、跡もちりぢりにかき回したらしく、獣の足跡がたくさんあつた。狼であろうか……。こんなことをご遺族の方々が知ったら、何と嘆かれることだろうと思い、夜が来ても寝つかれない夜を過ごした。

実際のことで、今思い出しても身の毛が逆立ち、ぞうーっとして寒くなってくる。(後略)

(注) まだ数名の方々からの証言がありますが、今回はこの四名だけといたします。

昭和二十一年五月中旬、伐採作業中「東京ダモイ達からすぐ集まれ」というソ連兵からの通知を受け、喜

びを胸に秘めて収容所に帰り、追い立てられるようにして移動したのです。(ハラゲンからキルガまで汽車で移動)

キルガには既に先着の人々があり、収容所もハラゲンとは違ってバラック建てではありませんでしたが、二段設備の暖炉も備え付けてありました(私はここで昭和二十三年十一月まで二年と数カ月を過ごすことになるのですが)。部隊はここでも主として伐採作業や材木運搬、材木の貨車搭載作業等であり、時期により草刈り、農場の手伝いなどで日を過ごしました。キルガ収容所に入った直後から、大工、左官、洋服仕立職人、自動車運転手、理髪職などの特殊専門技術者が、転属派遣、分遣という名目で(行先不明)隊を離れて行きました。部隊は先着部隊の人々を含めて再編成を行いました。その主力がコムソリスクへ移動しました。キルガに残ったのは百名足らずの人員であつたと思います。「立つ鳥後を濁さず」という諺がありますが、主力が移動した後の収容所内はまことに乱雑で、遺骨を放置したままには驚くとともに悲しく、人間の持つ非情

さに胸が痛みました。そして、俘虜の七ツ道具も至るところに散乱していて、整理するのに苦労したことを思い出しています。

一人だけで残留し他部隊残留者と合流しましたので、精神的には非常に楽になり、やれやれという気持ちになったことを思い出していますが、だれの命令でどのような理由で残ったのか、そこらあたりのことがよくわかりません。多分、上級幹部からは私の存在が煙たい感じを持たれていたのではあるまいかと、ひがんだ受けとめ方をした反面、部隊固有の人事の仕事がなくなり、解放された気持ちで、しばらく言われるままに仕事をしていました。寄り集まった人々の中には、だれ一人として知っている者もいませんでしたし、将校と名のつく人は軍医の外には一人もいませんでしたから、この收容所の責任者がだれであったのかも私の記憶は定かではありません。

いつごろであつたかは覚えていませんが、ぼつぼつ「民主教育」が始まり、一日の作業も終わり少しばかり改善された夕食も済んだ後で、机の上に立たされ、

全員監視の下に数人のアクチーブから罵詈雑言を浴びせられ、反動だ！敵だ！という烙印を押されそうになったこともありましたが、これに反論する知識も勇氣も持ち合わせない自分を情けなく思い、悔しさをかみしめました。が、反面、これも「芝居」の一つだ、と自分勝手に解釈するようにしてからは「心の重荷」とはなりませんでした。

伐採作業のときは皆さんと一緒に作業を行い、いつも一番先にノルマを完遂して、おくれている組を手伝い、最後にはソ連側に引き渡すのですが、幾組かは完遂できないものもあり、高さや長さをごまかして引き渡していましたから、ソ連側では私のことを「ヒートリコマンジール」と呼んでいたようであります。作業場所が広範囲になるので、集結する場所までの道順を通信紙に→で示して、山砲兵第一連隊の略号である「BA一一」と書いて誘導するようにしていましたが、ある日のこと、ソ連将校から「夕食後俺の家に来い」というお達しがあり、さては、「ヒートリコマンジール」で小言を頂戴するものと覚悟を決めて出頭しまし

たら、「お前は山砲一一連隊に所屬していたのか、B
A一一は日本へ帰ったのに、どうしてここに來たの
か」と根掘り葉掘り詰問され、どうも雲行がおかしい
ぞと思ひながら事実を説明したら、しまいは「俺は
日本軍の作戰要務令なら全部知っている」と、ロシア
語と日本語のチャンポンで威張つてみせてくれました。
それだけで事もなく済み、胸をなでおろしたことでし
た。そのとき、入ソ時に奉天で糧秣の積み込みをした
とき、掛け算ができなかつたソ連兵のことを思い出し、
頭の程度の開きの大きいにおかしさをかみ殺しまし
た。

昭和二十一年夏のこと、草刈りを命ぜられた二人組
の人が、言葉がわからぬため別の場所を刈り、ソ連兵
に文句を言われて刈り直しをさせられたので「よう、
本当にばかなことをしたなあ」と話し合つていたら、
それを聞きかじつたデシャートニックが、あのソルダ
ートは俺のことを「ヨーボネサバーカー」と言つたと
かんかんになつて怒つてきた。私は両方の話を聞いて、
その言葉の説明をして、デシャートニックを納得させ

るのに一苦勞したこともあります。

「よう、ほんとにばかなことをしたなあ」

「ヨーボネサバーカー」

風の吹きようでは似たように聞こえるかもしれませ
んが、その二人の兵はロシア語が全然わかりません。
サバーカーとはロシア語で犬のこと。日本語なら「畜
生」と見下げた意味ですから、通じない言葉は恐ろし
いものです。

昭和二十三年春であつたと思いますが、伐採作業を
していたときのことです。馬櫓に木材を積んで運搬し
ている地方人に出会つたことがあります。雪解けの時
期でしたから、櫓はやわらかくなつた土中にめり込み、
なかなか引き出せず、その地方人はやたらに鞭で叱咤
しながら「ヨッポイブホマーチ!!」と盛んに悪態を連
発しています。既にノルマを完了していた私は同僚と
一緒に、その様子を見ながら馬と馭者との關係につい
て馬談義をやつていましたが、その馬を見ているうち
に、少し痩せてはいるがどうも見覚えのあるような氣
がして、私は吸いつけられるように近づき、そつと声

をかけてみました。

「スギ・ヨ……」すると、もがいていた馬の耳がピンと立ち、ゆつくりと私の方を振り向いた。赤く充血し焦点を失ったような目に、キラリと光るものが見えた。私は「オーラ……」と言いながら首筋を軽く叩き、軍隊でやっていた時と同じように左前方から、特徴、傷痕を調べた。体毛はわずかに長くなり、四肢も泥にまみれていたから残雪で落とし、馬籍の記載事項を思い出しながら「白の状態」「旋毛・異毛の状態」を探したら、まぎれもなく私が手塩にかけて調教した「杉代」に間違いないことがわかった。

何という奇縁・奇遇であろう。それにしても杉代ほどの名馬を機曳き駄馬として使うとは……。私はその地方人に馬の入手のいきさつを尋ねた。ロシア語も正確には理解できなかったのですが、何でもその地方人が語ったことは、咬みついたり蹴ったりして幾人も負傷させ、使いものにならないので、ここに送られて木材運搬馬として使役しているとのことであった。

私は彼に代わって手綱をとり、手まね足まねで説明

しながら、この馬の馴し方を教えつつ、軍隊当時の音声による扶助と馬の呼吸を合わせて、めり込んでいた轡を引き出した。

「スギ、よくやったぞ……」

と愛撫すると、充血した目で私を見ながら、鼻孔を大きく開いて、ブルブルと鳴らした。それは軍隊当時そのままの動作だった。そして馬首を私の腕にこすりつけて、幾度も愛咬を繰り返した。馬としては最高の愛情表現である。折柄、西空を赤く染めて太陽は沈んでいく。杉代は黒い影となって遠ざかっていった。暮れてゆく暗黒の世界に一步一步吸い寄せられる杉代……それは私の運命を暗示しているように思われたのです。そんなことがあった数日後、収容所長の少佐に呼び出されました。何事か？と不安でしたが、例の地方人が「杉代」のことを報告したことがわかりました。私は形見として切り取っていたタテガミを見せて、実際に照合してみようと再び「杉代」と会うことになりました。切り取った跡を突き合わせ、真実を立証した上で馬談義にふけりました。私には楽しい一刻、少佐に

どのような意図があったのか……。その後何回か「杉代」と組んで木材運搬をさせられましたが、私は嬉しかったのです。「杉代」も甘えるように体を寄せてくるのです。私たちは巧まらずして二百%のノルマを上げました。

「セルジャント・ヒガシヤマは優秀だ。カピタンにするから、ここにいて働いてはどうか、かわいい娘も選んでやろう」と所長は思いがけないことを勧めた。私は日本に妻がいるからと断った（何糞!!俺はノルマの道具ではないぞ!と心で怒ってはいたが、言葉には出さなかった）。

数日後、私は所を変えた作業となったので「杉代」と再び会うことのない別れに胸中涙に暮れたことでした。「杉代」は、私だということを知っていたと信じています。北陵の収容所で別れるとき、好物の高梁を煮て与えたことも、涙の光った目、鼻を大きく開いて鳴らし腕に愛咬したことは、私に対する親愛の表現と疑うことはありません。馬は長く生きられたとしてもせいぜい二十五、六年だといわれます。あれからもう

五十年近くも過ぎ去ったのですから、生きているはずもあるまいが、やはり咬んだり蹴ったりして捕囚のうつぶんを晴らしていたのか? それとも、ソ連人の心もわかるようになり、私と一緒に働いたときのように、素直に従順な生涯を終えたであろうか?

そんな思いがして、忘れがたいことの一つ。

六、帰還

昭和二十三年十一月上旬、いよいよ帰国という名目で移動列車に乗り込んだ。皆さん、嬉しさいっぱいで故郷の話に花を咲かせていましたが、私は必ずしもそのような心境にはなれなかったのです。なぜならば、ソ連側の我々に対する今までの狡猾な接し方に業を煮やしていたからで、今度もまたどこかへ移動させられるであろうという受けとめ方でありましたところ、ナホトカから日本の船に乗り、十一月十八日舞鶴入港という形で帰国することができました。

ナホトカで乗船するまでの数日間、アクチーブによる思想教育があり、「反動」と烙印を押された幾人かはまた残留させられましたし、みずから進んで「帰

化」を希望する人もいました。

七、帰国してから

終戦後丸三年と三カ月に及ぶ抑留生活中、二回書いた葉書の一通が家族のもとまで届いていたので、驚くほどのこともなく皆が生還を喜んでくれました。

その時点での家族構成は老父に妻と弟、妹であり、老父を除いてみんなが、なりふり構わず働かねばなりませんでしたが、私は「ソ連帰りの赤」という烙印を押されていて、行政官庁や警察から差別を受け、働く職場もなかなか見つけられませんでした。

特に警察は私の行動を四六時中尾行監視していたと、ずっと後（昭和五十年ごろと思います）で警察署長をしていた軍隊当時の同僚から聞かされて唖然としたものです。そのとき、「では、俺が帰国して今までのどのような悪いことをしたのか？ また、君は私の思想についてどのように理解判断をしているのか」と詰問しましたが、そのことについて私の納得できる答えは返ってきませんでした。

かなり長い月日が過ぎて、どうにか職を得て、人並

みとは言えないにしても家を守り、子を育て、弟妹の婚姻も親代わりに片づけ、老父も妻も逝き既に二十年余りと過ぎ、これを書き残す時点の現在、二人の「曾孫」の顔を見る立場となりましたが、振り返ってみますと、この間、実に半世紀近くの歳月が流れ去っています。

己の歩んだ人生は一体何なのか……

殊に、命を的に働いたソ連抑留を含む十年余りの間の諸々の出来事は、今の自分に何をもたらしたであろうか……と考えたりもします。

また、同じ思いや、戦争と抑留を体験して生き残り、もう残り少なくなかけた余生を我々はいかに消し去るべきか？……

戦い敗れるも祖国あり

新潟県 高橋 吉郎

一、シヤマンガにおける日本軍墓地の改修作業